

会派調査(研修)報告書

NO.

平成29年 11月 29日

胎内市議会議長

森田 幸衛 様

(報告者) 会派名 緑風会

代表者名 渡辺 宏行

会派調査(研修)について、下記のとおり報告します。

調査・研修 日時	自 平成 29 年 10 月 25 日	調査・研修 場 所	和歌山県田辺市役所 (10月25日)
	至 平成 29 年 10 月 27 日		京都府舞鶴市カフェレストランほのぼの屋 (10月27日)
	2泊 3日(3日間)		

調査・研修 事項	和歌山県田辺市役所 中学校統合の経緯、課題について
	京都府舞鶴市 カフェレストランほのぼの屋 カフェレストランほのぼの屋の運営と、障がい者雇用について

調査・研修 出席者(参加者)	会長 渡辺 宏行
	幹事長 薄田 智
	坂上 清一
	会計 八幡 元弘

相手方(対応者)	和歌山県田辺市 教育委員会 学校教育課 指導主事 森下裕一郎 議会事務局 局長 糸川一彦
	カフェレストランほのぼの屋 店長 材木 淳志 議会事務局 総務課 調査係 係長 志摩貴士

<調査の結果または概要>

和歌山県田辺市（人口 76,046人 議員数 22人）

田辺市は、紀伊半島の南西側、和歌山県の南部に位置しており、総面積は和歌山県全域の2割を超え、近畿最大の面積を有している。地形としては、平野が少なく、森林面積が全体の約9割を占めている。この地域は、世界遺産の熊野古道・熊野本宮大社の代表される歴史や文化、温泉、農林水産業やその加工業、観光リゾート産業などが主な産業である。

京都府舞鶴市（人口 82,069人 議員数 28人）

舞鶴市は、京都府北東部の日本海側に位置し、舞鶴港は天然の良港であり若狭湾国定公園に指定されている。16世紀末、天正年間に歌人・武人として有名な細川幽斎とその子忠興が鶴が舞い降りたところに城を築いた、あるいは城の形が飛んでいる鶴に似ていたことから、城の名を「舞鶴」と呼ぶようになり、地名になったと言われている。市内には、安土桃山時代の田辺城址や城下町の古い町並みが残り、旧海軍ゆかりの赤れんが倉庫群、戦後の海外引揚事業やシベリア抑留などに関する資料を展示した舞鶴引揚記念館など歴史的資源が多数ある。

<調査の所見、感想>

田辺市（中学校統合の経緯、課題について）

田辺市における学校統合に関しては、平成17年の田辺市、中辺路町、本宮町、大塔村、龍神村の5市町村の合併後、小中学校あり方検討委員会の提言書を作成し、その提言書に基づき基準を設定し、適正規模を定めて進められた。その基準は、「保護者、教職員とも複式学級は肯定していない。学社融合の視点から、旧町村から学校がなくなるような配置は避ける。小学校では、通学時間は40分以内が妥当。中学校では、学年2クラス以上で、各教科1名以上の教員が配置され、ある程度の種類の部活動が保証される。」というものであった。

これらを踏まえ、田辺市独自の適正規模として、「小学校は、1クラス25人程度の6学年で150人程度。中学校は、1クラス25人程度で学年2クラスの150人程度。」と定めた。

その後、この提言書について対象地域全てで説明会を開き、丁寧に説明会を実施した。その中で、地域住民や保護者が抱く学校環境の変化、人間関係の不安、

通学路・通学方法の不安、地域との関係の希薄化などに具体策を示しながら、可能な限り不安を軽減していき、統合ありきではなく、児童生徒・地域・保護者にとって最善の方法を模索し、学校統合を進めた。

また、統合後は学校がなくなった地域と学校のつながり、児童生徒の心のケアが課題となっており、統合した地域全体での合同運動会や児童生徒に対するきめ細かい配慮を行い、課題解消を図っている。

この学校統合に関する視察を通じ、基準を策定し、段階を踏んで、対象者の不安を軽減しながら丁寧に進めていくことの重要性を感じ、参考とすることの多い視察となった。

舞鶴市（ほのぼの屋の運営と、精神障がい者雇用について）

ほのぼの屋の前身は、小規模作業所「まいづる共同作業所」として竹ぼうきづくりや下請け作業からスタートし、次に「第2まいづる共同作業所」として古本屋を行い、2002年にフレンチレストランとしてほのぼの屋をオープンし15年目を迎え、現在スタッフは17名で営業している。

ほのぼの屋は、舞鶴湾を一望できる高台にある本格的なフランス料理をリーズナブルに提供するカフェレストランであり、店内は吹き抜けで海に面して2階部分までガラス張りになった開放感のある造りとなっており、見事な景色を楽しむことができる。ランチ、ディナーともにすぐ満席になるほど評判のレストランであり、常連客は精神障がい者が働くレストランと知っているが、接客サービスも礼儀正しく丁寧なため、楽しい食事の時間を過ごしているとのことである。

ほのぼの屋を経営する材木店長の話の中で、2つのことが非常に印象に残った。1つは、「障がい者が働いているから、来てください。レストランごっこはしない。」という気持ちで運営している。2つ目は、「スタッフの給料を増やすために、運営する事業を作業所から古本屋に、そしてフレンチレストランへと変化させ、生活するために必要な給料5万円を目標に取り組んできた。スタッフが経済的に自立すると、言動が変化してきた。」

この話を聞いて、経営者の情熱とスタッフを思いやる気持ちを強く感じた。このほのぼの屋の視察で、ビジョンを持ち、明確な目標を立てることの大切さを改めて感じる事ができた。市政においても同様のことが言えると再認識し、意義のある視察となった。

以上